

1次元確率微分方程式の解の pathwise uniqueness
について

神大理 中尾慎太郎

1次元確率微分方程式の解の pathwise uniqueness について議論する。 $a(x)$ と $b(x)$ を有界で Borel-可測な関数とする。次の1次元確率微分方程式を考慮しよう:

$$(1) \quad dx_t = a(x_t) dB_t + b(x_t) dt.$$

$a(x)$ と $b(x)$ が Lipschitz continuous ならば、解は任意に与えられた Brownian motion 上に構成され、unique であることが K. Ito [1] により示された。 $a(x)$ が退化している場合の一意性についての所見は、Skorohod, Girsanov, H. Tanaka, T. Yamada and S. Watanabe [5] 等がある。Girsanov は $a(x) = |x|^\alpha$, $b(x) \equiv 0$ の場合、 $\alpha \geq \frac{1}{2}$ ならば pathwise uniqueness が成り立ち、 $0 < \alpha < \frac{1}{2}$ ならば分布の意味でも一意性が成り立たないことを示した。Skorohod と H. Tanaka により $a(x)$ が α -Hölder continuous ($\alpha > \frac{1}{2}$) ならば pathwise uniqueness が成り立つ二

とが示された。最近 T. Yamada and S. Watanabe [5] は $\alpha = \frac{1}{2}$ を含む形でこの結果を拡張した。

次に $|a(x)|$ が下からある正定数で与えられている (今後一様に正であると呼ぶことにする) 場合については、Feller, Ito, McKean 等の 1次元拡散過程に関する仕事により分布の意味では一意性が成り立つことが分かっている。しかし $a(x) = \text{sgn } x$, $b(x) = 0$, $x_0 = 0$ のときは $\mathcal{F} \{ |x_s|; s \leq t \} = \mathcal{F} \{ B_s; s \leq t \}$ なので、 x_t は x_0 と $\{ B_s; s \leq t \}$ の可測関数として表わすことは出来ない。もし pathwise uniqueness が成り立てば、 x_t は x_0 と $\{ B_s; s \leq t \}$ の可測関数として表わすことが出来ることが [5] により示された。 $a(x)$ が一様に正の場合の研究としては次のものがある。M. Motoo により $a(x)$ が Lipschitz 連続で一様に正、 $b(x)$ が有界可測ならば pathwise uniqueness が成り立つことが示された。 $a(x)$ が退化している場合には、 $b(x)$ についての何等かの modulus of continuity が必要である。M. Motoo の結果の $a(x)$ についての Lipschitz 連続性は有界変動性でよいことを示すのが目的である。

等式 (1) の意味は次の通りです。 $(\Omega, \mathcal{F}, P; \mathcal{F}_t)$ は確率空間 (Ω, \mathcal{F}, P) と \mathcal{F} の sub σ -algebra の増大する族 $\{\mathcal{F}_t\}$ により

成っているとす。

Definition. 1. (1)の解とは、ある $(\Omega, \mathcal{F}, P; \mathcal{F}_t)$ とその上で定義された確率過程 $X_t = (x_t, B_t)$ で、次の条件をみたすものことである。

(i) 確率 1 で X_t は t に関して連続で、 $B_0 = 0$ 、

(ii) X_t は $\{\mathcal{F}_t\}$ -adapted で、 B_t は $\{\mathcal{F}_t\}$ -Brownian motion である。

(iii) X_t は次の等式をみたす

$$x_t = x_0 + \int_0^t a(x_s) dB_s + \int_0^t b(x_s) ds \quad \text{a.s.}$$

但し右辺第 2 項の積分は確率積分である。

Definition. 2. 等式(1)について pathwise uniqueness が成り立つとは、任意の $(\Omega, \mathcal{F}, P; \mathcal{F}_t)$ 上で定義された任意の 2 つの解 $X_t = (x_t, B_t)$, $Y_t = (y_t, B'_t)$ で $x_0 = y_0$, $B_t \equiv B'_t$ ならば $x_t = y_t$ である時、呼ぶことにする。

Lemma. $(M_t, V_t)_{t \in [0, T]}$ を確率空間 (Ω, \mathcal{F}, P) 上で定義された連続な実数値確率過程の対とする。 $V_t(\omega)$ の $[0, T]$ での全変動 $\|V(\omega)\|_T$ の平均が存在し、 M_t が martingale で

$$(i) \quad M_0 = 0 \quad \text{a.s.}$$

(ii) 正定数 m_1, m_2 として

$$(2) \quad m_1 M_t(\omega) \leq V_t(\omega) \leq m_2 M_t(\omega) \quad \text{a.s.}$$

for $(t, \omega) \in \{(t, \omega), t \in [0, T] \text{ and } M_t(\omega) \geq 0\}$

をみたすものが存在するとする。

この時、 $M_t = 0$ a.s. for $0 \leq t \leq T$ である。

(Proof) $y \in \mathbb{R}$ について、 $N_1(y, \omega)$ を $V_t(\omega) = y$ なる $t \in [0, T]$ の個数とすると、Banach's theorem (cf. [4] pp. 280) により

$$(3) \quad \|V(\omega)\|_T = \int_{-\infty}^{\infty} N_1(y, \omega) dy$$

である。明らかに $m_1 < m_2$ と仮定してよい。 $y > 0$ について、 $N_2(y, \omega)$ を $M_t(\omega)$ の $[0, T]$ での number of $[\frac{1}{m_2}y, \frac{1}{m_1}y]$ -downcrossings とする。条件(2)により

$$(4) \quad N_1(y, \omega) \geq N_2(y, \omega) \quad \text{for } y > 0$$

である。 $y > 0$ について、次の様に stopping time の列 $\{T_n\}$ を定義する。

$$T_0 = 0$$

$$T_{2n+1} = \inf \{ t \geq T_{2n}; M_t = \frac{1}{m_1} y \} \wedge T \quad n=0, 1, 2, \dots$$

$$T_{2n+2} = \inf \{ t \geq T_{2n+1}; M_t = \frac{1}{m_2} y \} \wedge T \quad n=0, 1, 2, \dots$$

この時、 $n=1, 2, \dots$ について、次の不等式が成立する。

$$\begin{aligned} & \left(\frac{1}{m_1}y - \frac{1}{m_2}y\right)(N_2(y, \omega) \wedge n + 1) \\ & \geq \sum_{k=1}^n \left\{ M_{T_{2k-1}}(\omega) - M_{T_{2k}}(\omega) \right\} + \left\{ (M_T(\omega) - \frac{1}{m_1}y)V_0 \right\} \chi_{\{N_2(y, \omega) < n\}} \end{aligned}$$

但し χ は定義関数である。平均をとると

$$E[N_2(y) \wedge n] \geq \frac{E\left[\left\{ (M_T - \frac{1}{m_1}y)V_0 \right\} \chi_{\{N_2(y) < n\}}\right]}{\left(\frac{1}{m_1} - \frac{1}{m_2}\right)y} - 1$$

$n \rightarrow \infty$ にすると

$$(5) \quad E[N_2(y)] \geq \frac{E\left[(M_T - \frac{1}{m_1}y)V_0\right]}{\left(\frac{1}{m_1} - \frac{1}{m_2}\right)y} - 1$$

==> $P(M_T \neq 0) > 0$ と仮定すると、次の様な $\varepsilon, \delta > 0$ が存在する。

$$(6) \quad E\left[\left(M_T - \frac{1}{m_1}y\right)V_0\right] > \varepsilon \quad \text{for } 0 < y < \delta$$

(3) と (4) により

$$\int_0^\infty E[N_2(y)] dy \leq \int_{-\infty}^{\infty} E[N_1(y)] dy < \infty$$

(5) と (6) により

$$\int_0^\infty E[N_2(y)] dy = \infty$$

これは矛盾である。故に

$$P(M_t = 0) = 1 \quad \text{for } 0 \leq t \leq T$$

Q. E. D.

Theorem. $a(x), b(x)$ を有界 Borel-可測関数で、 $a(x)$ はすべての有限閉区間で有界変動とする。更に

$$(1) \quad a(x) \geq c > 0 \quad \text{for } x \in \mathbb{R}$$

をみたす定数 c が存在するとする。この時、等式(1) について pathwise uniqueness が成り立つ。

(Proof) $|a(x)| \leq M, |b(x)| \leq M$ for $x \in \mathbb{R}$ とする。初期分布が point mass の場合に証明出来れば、一般の場合は明らかである。 $X_t = (x_t, B_t), Y_t = (y_t, B_t)$ を(1)の解で、 $x_0 = y_0$ が定数であるものとする。 $N > |x_0|$ について

$$\tau_N = \begin{cases} \inf \{ t \geq 0 : |x_t| = N \} \\ \infty \end{cases} \quad \text{if } \{ \} = \phi$$

$$\eta_N = \begin{cases} \inf \{ t \geq 0 : |y_t| = N \} \\ \infty \end{cases} \quad \text{if } \{ \} = \phi$$

$$\delta_N = \tau_N \wedge \eta_N$$

と定義する。

$$f(x) = -2 \int_0^x \frac{b(y)}{a^2(y)} dy, \quad \varphi(x) = \int_0^x \exp [f(y)] dy$$

とおく。time substitution と Cameron-Martin's formula (cf. [3]) により、 $c, M, N, t \in \mathbb{R}$ による

$$(8) \quad E \left[\int_0^{t \wedge \delta_N} g(x_s) ds \right] \leq K_1 \|g\|_{L^1([-N, N])} \quad \text{for } g \in L^1([-N, N])$$

を与える定数 $K_1 > 0$ が存在する。 φ は絶対連続で φ は局所可積分なので

$$(9) \quad \varphi(x_{t \wedge \tau_N}) = \varphi(x_0) + \int_0^{t \wedge \tau_N} \varphi'(x_s) dB_s \quad \text{a.s.}$$

φ は \mathbb{R} から $I = (\varphi(-\infty), \varphi(\infty))$ への同型写像なので

$$\nabla(x) = \varphi' \circ \varphi^{-1}(x), \quad h(x) = \int_0^x \frac{1}{\nabla(y)} dy \quad \text{for } x \in I$$

が定義出来る。明らかに ∇ は I のどの有界閉区間でも有界変動なので、 $\|\nabla\|_N$ を ∇ の $[\varphi(-N), \varphi(N)]$ での全変動とする。

次の様な近似関数列 $\{\nabla_n(x)\}_{n=1,2,\dots}$ を取る事が出来る。

$$(i) \quad \nabla_n(x) \in C^1(\mathbb{R}) \quad \text{and} \quad c \leq \nabla_n(x) \leq M \quad \text{for } x \in \mathbb{R}$$

$$(ii) \quad \int_{\varphi(-N)}^{\varphi(N)} |\nabla(y) - \nabla_n(y)| dy \leq \frac{1}{n} \quad \text{and} \quad \|\nabla_n'\|_{L^1([\varphi(-N), \varphi(N)])} \leq \|\nabla\|_N.$$

$$h_n(x) = \int_0^x \frac{1}{\nabla_n(y)} dy \quad \text{for } x \in \mathbb{R}$$

とおくと、 $h_n(x) \in L^2(\mathbb{R})$ なので、 Itô's formula を h_n に適用すると

$$\begin{aligned} h_n(\varphi(x_{t \wedge \tau_N})) &= h_n(\varphi(x_0)) + \int_0^{t \wedge \tau_N} \frac{\nabla(\varphi(x_s))}{\nabla_n(\varphi(x_s))} dB_s \\ &\quad - \frac{1}{2} \int_0^{t \wedge \tau_N} \frac{\nabla_n'(\varphi(x_s)) \nabla^2(\varphi(x_s))}{\nabla_n^2(\varphi(x_s))} ds \end{aligned}$$

$$= \tilde{r}_n(\varphi(b_0)) + L_t^n + W_t^n$$

(ii) より

$$|\tilde{r}(b) - \tilde{r}_n(b)| \leq K_2 \frac{1}{n} \quad \text{for } x \in [\varphi(-N), \varphi(N)]$$

をみれば、 C, M, N にしか依らない定数 $K_2 > 0$ が存在するので

、 $\tilde{r}_n(\varphi(x_{t \wedge \tau_N}))$ は $\tilde{r}(\varphi(x_{t \wedge \tau_N}))$ に概収束する。

$$E[(L_t^n - B_{t \wedge \tau_N})^2] \leq K_3 \frac{1}{n}$$

をみれば、 C, M, N, t にしか依らない定数 $K_3 > 0$ が存在するので

で、 L_t^n は $B_{t \wedge \tau_N}$ に概収束する部分列を持つ。

$$W_t = \tilde{r}(\varphi(x_{t \wedge \tau_N})) - \tilde{r}(\varphi(x_0)) - B_{t \wedge \tau_N}$$

とおくと、上の二つより W_t^n の部分列が W_t に概収束する。

$\|W^n\|_t$ を W_s^n の $[0, t]$ での全変動とすると

$$E[\|W^n\|_t] \leq K_4 \left[\int_0^{t \wedge \tau_N} |\tilde{r}'_n(\varphi(x_s))| ds \right]$$

をみれば、 C, M, N にしか依らない定数 $K_4 > 0$ が存在すること

が容易にわかる。time substitution により

$$E \left[\int_0^{t \wedge \tau_N} |\tilde{r}'_n(\varphi(x_s))| ds \right] \leq K_5 \|\tilde{r}'_n\|_{L^1([\varphi(-N), \varphi(N)])}$$

$$\leq K_5 \| \tilde{r}' \|_N$$

をみれば、 C, M, N, t にしか依らない定数 $K_5 > 0$ が存在する。

従って $\|W\|_t$ を W_s の $[0, t]$ での全変動とすると

$$E[|W|_t] \leq K_4 K_5 |V|_N$$

である。 $f(x)$ の定義より

$$m_1(x-y) \leq f(x) - f(y) \leq m_2(x-y)$$

$$\text{for } y \leq x \text{ and } x, y \in [\varphi(-N), \varphi(N)]$$

を非負可正定数 m_1, m_2 が存在する。

$$M_t = \int_0^{t \wedge \delta_N} (\sigma(\varphi(x_s)) - \sigma(\varphi(y_s))) dB_s,$$

$$V_t = f(\varphi(x_{t \wedge \delta_N})) - f(\varphi(y_{t \wedge \delta_N})),$$

として Lemma を適用することにより

$$P(\varphi(x_{t \wedge \delta_N}) = \varphi(y_{t \wedge \delta_N})) = 1$$

従って

$$P(x_{t \wedge \delta_N} = y_{t \wedge \delta_N}) = 1.$$

$\lim_{N \rightarrow \infty} \delta_N = \infty$ a.s. なるので、 $P(x_t = y_t) = 1$ を得る。

□. E. D.

Remark. Theorem 7, $a(x)$ が連続ならば、(8) を $A(x) > 0$ for $x \in \mathbb{R}$ に弱めることが出来る。

References

- [1] K. Ito, On a stochastic integral equation, Proc. Japan Acad. 22 (1946), 32-35.
- [2] K. Ito and H. P. McKean, Jr., Diffusion processes and their sample paths, Springer-verlag 1965.
- [3] H. P. McKean, Jr., Stochastic integrals, Academic Press 1969.
- [4] S. Saks, Theory of the integral (Monografie matematyczne, vol. 7), Warsaw, 1937.
- [5] T. Yamada and S. Watanabe, On the uniqueness of solutions of stochastic differential equations, J. Math. Kyoto Univ. 11 (1971), 155-167.